



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

企画展「タイルの幾何学」特集

タイルが編み出す装飾

vol. **39** | 季刊 **春**
2016



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.39 | 季刊 春
2016

表紙写真

世界のタイル博物館の2階。花の形の透かしタイルから春の光が差し込んで、周囲をやさしく包みます。子どもたちがうれしそうに駆け寄り、さわったり、覗き込んだり。春らしいピンクのズボンが、この場にぴったりの姉妹でした。(2016.3.5)

撮影：加藤弘一

企画展「タイルの幾何学」特集 タイルが編み出す装飾

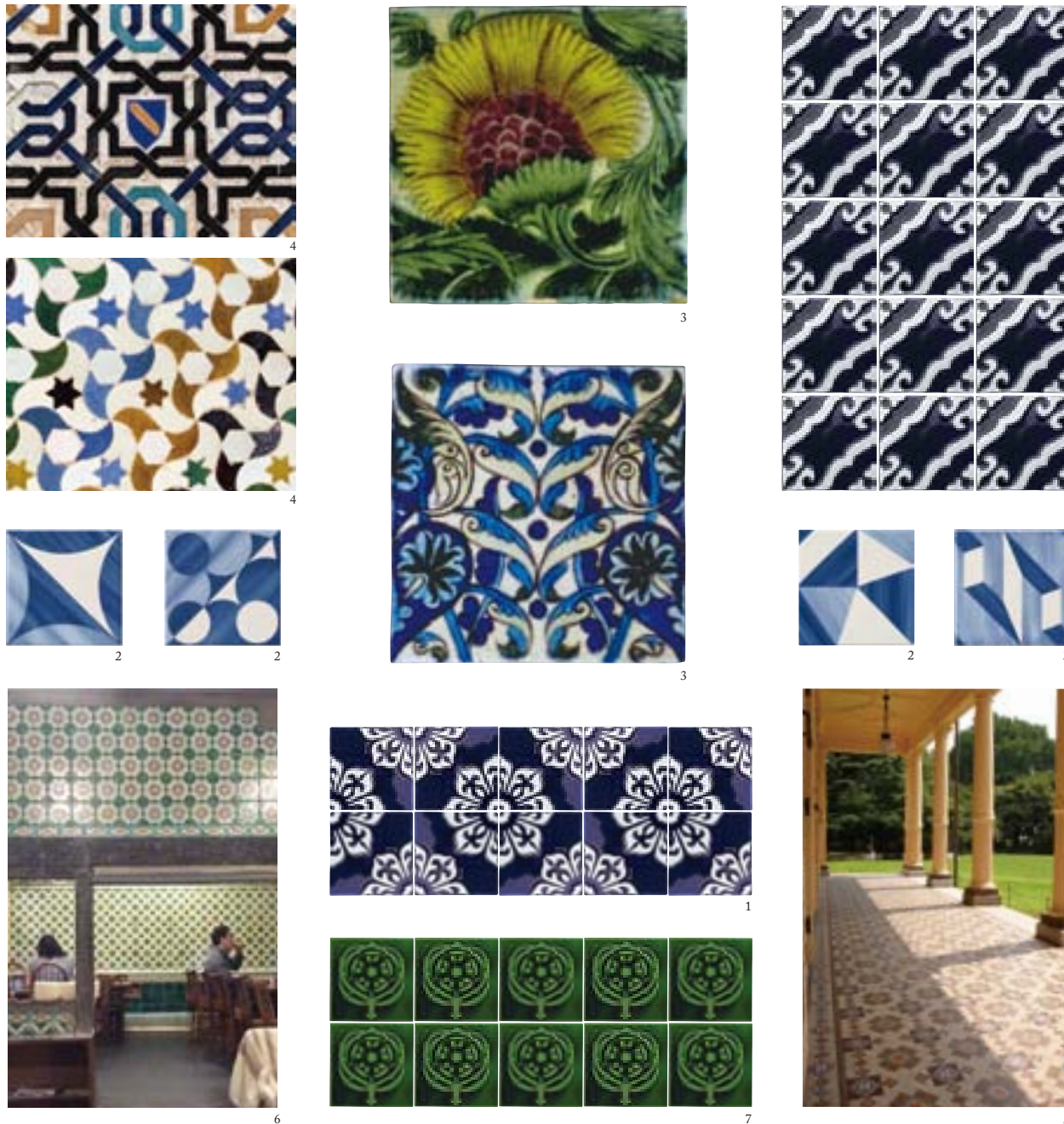
- 02 インタビュー
連続するタイルの魅力—イスラームを源流として
柘屋友子
- 06 一枚の奥ゆき、幾千の煌めき
◆タイル職人を魅了したモロッコ、ゼッリージュの幾何学模様

LIVE SCHEDULE

- 10 これからの催し
タイルの幾何学—秩序と無限の模様
- 11 炎を操る 刀・やきもの・ガラス—1050度、美の誕生
ゴールデンウィーク特別イベント
みんなでシャボン玉を飛ばそう

LIVE REPORT

- 12 開催報告
企画展『I LOVE タイル—タイルがつなぐ街かど』関連イベント
タイル街歩き その1 京都/その2 常滑
- 13 Tiles 一枚の奥ゆき、幾千の煌めき
企画展『素掘りのトンネル マブ・ニ五穴』関連 “ボタニカル”・ワークショップ
竹と花でトンネルを作ろう～アーティスト・ガーデンの試み～
タイルが伝えるペルシャ物語



企画展「タイルの幾何学」特集

タイルが編み出す装飾

古代ギリシアから発達した幾何学が、タイルに新しい命を吹き込んだ。

一枚のタイルは連続し、平面に、空間に敷きつめられる。

その時代にふさわしい風景を生み出しながら—

企画展「タイルの幾何学—秩序と無限の模様」にちなんで、時代を越えて、人々を魅了し続けるタイルの装飾に迫ります。

常滑から※

38

郷愁のレールを探して



昨年11月、リーナーレギヤラリー（東京）で開催された「鉄道遺構・再発見」展を見学した。ひっそりと佇むかつての鐵路が鉄道ファンの心をひきつけた。それに因んで、常滑からそんな風景を紹介しようと思う。個人的には、小さな町工場の土間に敷かれたレールも魅力的で、常滑にもきつとあるに違いないと考え、市内の酒蔵2社に問い合わせてみた。しかし残念なことに、レールはないとの返事をいただいた。そこで、本格的な鉄道レールを撮影しようとして、常滑市の北の端、名古屋寄りにある名鉄電車の大野町駅近くに行った。駅の北側に、最小曲線半径が240mというこの常滑線でもっともきついカーブがある。民家が線路すれすれに立ち並び、電車は軋み音を発しながら通過していく。名古屋から常滑を経由して中部国際空港まで28分で走るノンストップ特急も、ここではスローダウンをせざるを得ない。

家々の屋根の隙間からふと見えた電柱と架線。こんなところに電車が走っているのだと思える景色と、その構図が小さい頃から好きだった。ここも近づいて見ると、大きくカーブしたレールがあった。ここを電車が通るのだと嬉しかった。

竹多格（主任学芸員）

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

連続するタイルの魅力

—イスラームを源流として

榎屋友子

東京大学東洋文化研究所教授



聞き手：中齋紀夫
INAXライブミュージアム
企画担当

建築に色彩を求めた時、 タイルが選ばれた

—1枚のタイルは単体でも十分に美しいですが、実際の空間では、幾枚ものタイルが連なることで編み出される優雅な装飾性が人々を惹きつけます。イスラーム建築の色彩やかな壁面装飾は、その原点と言っていると思います。

たとえばモスクの中の、隙間がないほどに装飾で埋め尽くされた空間。写真を見ると、その空間に身を置いてみたいと強く感じます。礼拝に訪れた当時の人たちも、その空間には感動したのではないのでしょうか。

榎屋 そうですね。こんなにすごいモスクに来られた！
—思ったかもしれないですね。

—そうした空間にタイルが使われているのは、イスラーム建築の特徴の一つと考えていいのですか？

榎屋 ごく初期はモザイクなどで宗教建築内を飾っていましたが。ダマスカスの大モスクは金彩モザイクで室内を飾っています。最初のイスラーム美術は地中海世界で発展していったのですが、その中心のシリアやエルサレムには、古来キリスト教美術が根っこにあります。

—石の建築ですね。

榎屋 大理石など石を使っていた地域では表面がきれいなので、タイル装飾はあまり発達していきません。イラク、イランなど煉瓦を建築に使う地域ではざらざらとした土の壁面になるので、すべらかな表面で色もきれいなタイルを採用していくことが多くなってきます。

タイル自体は9世紀にはあったようです。動物みたくな不思議な文様が描いてあるラスター彩がイラクで発掘されていますが、断片的で当時の設置状況ははっきりとはわかりません。現存する建物から考えると、初期は空間を埋め尽くすといった感じではなく、焼成煉瓦の土色の中に一部色が入るところから始まったようです。外壁において施釉煉瓦を混ぜ、内壁にもタイルを部分的に貼ることで、茶色の中に鮮やかな青が際立つという感じでした。12世紀末あたりから、だんだんタイルの面積が増えていきました。

—どうですか。

榎屋 器の製陶技法をタイルに応用して、多様なタイプをつくる工房ができたからです。

「幾何学文」空間を効率よく 美しく埋める合理的な解

—人間は美しいもの、より気持ちのいいものを求めるのでしょうか。

榎屋 そうだと思います。モスクにはメッカに向かう礼拝の方向の壁の中央にミフラーブという壁龕(ニッチ)があって、この聖なる部分を美しくしたいのです。浮彫りなどかなり複雑な凹凸をもつ美しい造形をつくり出すこともあるし、色彩的に美しいのがいい時もある。色彩を求めた時にはやはり、陶器になってきます。

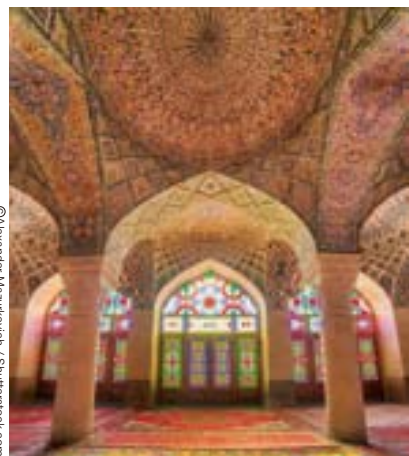
14世紀までにはイランやトルコで、単色の釉薬をかけて焼いたタイルの形をデザインに合わせて切って、それを組み合わせる「タイル・モザイク」ができました。北アフリカとスペインは他の地域と少しタイプが違い、「ゼッリージュ」といって決まった形のタイルを組み合わせると幾何学的な模様をつくっていくタイプです。

—幾何学文はどんな発達していくのですか。

榎屋 「幾何学文」というのは、曲線や直線を組み合わせることでも生み出される幾何学図形による模様です。イスラームでは、古代ギリシャのユークリッドらの学問を引き継いで数学が非常に発達していて、複雑な幾何学的作図が可能でした。空間を効率よく美しく埋めようとするれば、幾何学文は合理的な答えだと思っています。—具体的な物のイメージではなく、埋めつくすためのデザイン？
榎屋 一神教の神になるべく近づきたいという思いがあって、その一つが数学であり、作図によって無限のものをつくっていくということなのだろうと思います。イスラームでは宗教的な建物で人物や動物は表現に用いられませんので、幾何学文と、それから「連続していく」ということで蔓草模様などの「植物文」が高度

右：シャー・モスク
(イラン、イスファハーン
1611年～38年)

左・下：ナスィーロール・
モルク・モスク
(イラン、シーラーズ
1888年完成)



©Alexander Mazurkevich / Shutterstock.com

©NICOLA MESSANA PHOTOS / Shutterstock.com